余白の旅

思索のあと

井上洋治

井上（いのうえ）　洋治（ようじ）

1927年、神奈川県に生まれる。東京大学文学部哲学科を卒業。1950年、フランスに渡り、カルメル会修道院に入会、リヨン、リールの各大学で学ぶ。1957年、帰国、1960年、司祭となる。現在、真生会館理事長。
主著　『日本とイエスの顔』『私の中のキリスト』ほか。

余白の旅　思索のあと　　定価1400円

1980年9月1日　初版発行
1980年10月30日　再版発行

© 井上洋治　1980

著者　井上洋治

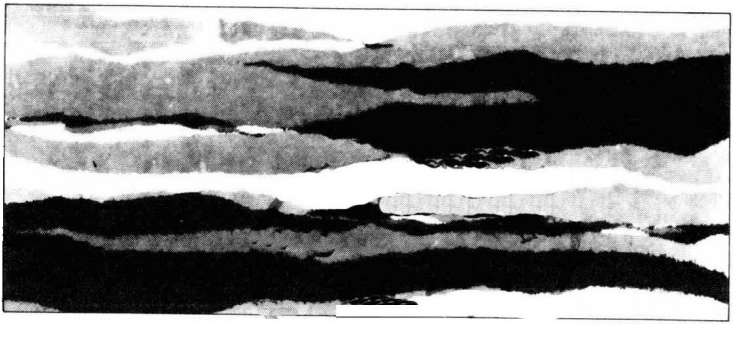
発行所　日本基督教団出版局
〒160　東京都新宿区西早稲田2丁目3の18
振替　東京8-145610　電話(204)0421(代)

印刷　精興社　カバー印刷　伊坂美術印刷　製本　市村製本所

0016-620303-6100(日キ販)

余白の旅

思索のあと



井上洋治

余白の旅＊目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

昏迷 9
白い道 25
希望 45
登攀と挫折 55
暗中模索 69

微光 91
芽生え 121
嵐 171
結晶 225
余白 249
あとがき 263

裝丁　熊谷博人

余白の旅

昏迷

今しも真赤な太陽が、青く広い地中海の水平線に沈もうとしていた。ひろびろと広がる海岸線の遙か左手には、遠くヒッタイト時代から神々が住むと伝えられている聖山カシウスが、その柔かな山はだを残照のうちにうっすらと清らかにうかびあがらせていた。

海から吹きつけてくる潮風は意外に強く、たった一軒海岸にあるレストランの前庭に立っている私の頬を横なぐりにした。つい先ほどまで、茶褐色のせいか、青い海と白い波を背景にしてかなりはっきりと遠く下の方に見えていた古代セルキア・ピエリアのわずかに残っている埠頭の遺跡も、今はもうぼんやりと薄暮のうちに消えていこうとしていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

黒ずんだ海とは対照的に、茜色の夕焼け空が目にしみるように美しかった。この色をいつまでも心に焼きつけておきたい、そう思いながら私は落陽を眺めて立ちつくしていた。

ローマ時代には、アンテオケアと呼ばれていた、現在のアンタキャの町から南西三十キロほどの所に、古代セルキア・ピエリアの港町があった。往時はシリアの首都であり、ローマ、アレキサンドリアと並んで人口五十万を数えたといわれる、ヘレニズム・ローマ時代の代表都市アンテオケアの海港として栄えた町で、その埠頭の遺跡がわずかにサマンダーグ村の近くに残っているのである。

その村の背後には、「チトスのトンネル」と呼ばれている運河がある。水流をせきとめ、岩をくりぬいて作られた長さ数百メートル、高さ十数メートルに及ぶ広大なもので、当時のローマ皇帝チトスの権力と富とをいかんなくしのばせるものであるが、私たちがこのトルコの片田舎の町を訪れたのは、ローマ皇帝の偉業をしのぶためではなかった。イエスの弟子パウロが、バルナバと一緒に、おそらく紀元四五年頃、第一次の伝道旅行に船出したのがこのセルキア・ピエリアの港からだったからである。

日はすでに西の水平線に沈み、生まれて初めてみるガス燈の青白い光が、羊の肉をかこむ私たちの食卓をてらしだしていた。アラビアンナイトを連想させるような、頭にターバンを巻いたトルコ人の料理人が、暗闇からガス燈の光の輪の中にあらわれては、また暗い闇の中に消えていった。

食事も終り、一人で波の音とヒューヒューとなる風の音とを聞きながら、パウロの船出の日を思い、更にパウロの回心の日を思いながら、暗くなった海に向かって立っていた私のまぶたには、まださっきみた夕焼けの空の美しさが焼きついていた。

昔から何故か私は夕焼けの空が大好きである。まだ幼稚園に通っていた子供の頃、よく母に手をひかれながら眺めた夕焼け空の記憶が、意外に強く私の心の奥底に焼きついているからなのかもしれない。

私は六歳半までを大阪の天王寺ですごした。今は上本町六丁目の近鉄の駅には立派なビルがたっているが、当時は小さな三笠屋というデパートがあるだけであった。上本町六丁目の駅は、近鉄の前身である大軌（だいき）鉄道の始発駅で、私の家の近くにはこの大軌鉄道の踏切りがあった。私は母に手をひかれて散歩しながら、よくこの踏切りのところで夕焼けの空を眺めたものであった。

一昨年岡山への所用の帰り、私は初めて私の育った天王寺の北山町のあたりを歩いてみた。太陽のギラギラと照りつける暑い夏の午後であった。踏切りはもうなくなってしまっていて、道は立体交叉になってしまっていたが、それでも弟との喧嘩で足をけがしてかつぎこまれた赤十字病院は、

きちんともとの場所に残っていたし、一年の一学期だけをすごした小学校は、分校にこそなってはいたが、今にもこわれそうな木造の姿を真夏の日ざしのもとにひっそりとさらしていた。

特に私の育った北山町のあたりが戦災にあわずに焼け残っていて、くねくねとした狭い路地や格子のたたずまいをそのままにとどめていてくれたのが何とも嬉しかった。

横断歩道の信号を待つ間
幼い少女が母に夕焼けを教えている
「夕焼けよ　夕焼けよ　きれい」歌のようにくりかえして
母の答えはなくて　信号が変るや
子を叱り　急がせて歩き出した
子はもう〝夕焼け〟を言わなかった
母におくれまいとする子の急ぎ足
母には　夕焼けを見る間もおしく
急ぎ帰らなければならない理由があったのだろうか
子の心にこの日の夕焼けは強く残ることだろう

消えないままのさびしさを私の心にも残している

先ほど偶然に手にした高田敏子さんの詩であるが、何か私の幼い頃が思い出されてなつかしかった。昔は何となく生活のリズムにもゆとりがあったからだろう、私の母は一緒に手をつなぎながら夕焼けを見ていてくれたものであった。

確かに夕焼け空には、ある哀しさがあり美しさがある。そこには廃墟の美に通ずるものがあるのかもしれない。子供心に、この「黄昏の美」とも呼びうる夕焼け空の美しさに心惹かれながらも、いやそれだからこそ、また私は暖かな「母の掌」を欲し、母が常に夕焼け空を眺めている私の後ろに手をつないでひっそりと立っていてくれることを望んだのかもしれない。そして大きくなってから、両親の暖かなふところを去って一人で歩まねばならなくなった私の人生は、夕焼け空の彼方にあるものに限りなく憬れつつ、同時にその自分をまたそっと後ろからささえ、見守っていてくれるまなざしを常に求め続けてきた人生であったような気がするのである。

心理学者、霜山徳爾氏の著『人間の限界』のなかに次のようなことばがある。

こどもは真に情熱的に遊ぶ者でありつづけ、いきいきとした生命の充実感を味わい得る。重い疲労の日、粉飾される倦怠の夜、を繰り返す成人とことなり、こどもがそのことに成功するのは、こどもが「信頼する」被保護性の雰囲気の内に遊んでいるからである。一般に「信」の成立は人間性の良い発展と結びついている。恵まれたこどもは、その信じる成人から決して見棄てられることはないと思う故に、安んじて遊ぶし、おのれにたのむところを得るのである。

この「暖かなまなざしのもとでの充実感」というものは、はっきり意識するとしないとにかかわらず、私だけではなく、誰もが追い求めているものなのではないだろうか。フロイト派の心理学者は、おそらくそれを「退行現象」と呼ぶであろう。幼児性への逆戻りといって非難するかもしれない。しかし、それこそが、人間というものが、真の自己の在り方を恢復するということなのではないだろうか。私は人間とはまさにそういうふうに生まれついているものだと思うのである。

霜山氏はさらに『人間へのまなざし』という著書のなかで、次のようにいっている。

ロマン・ロランは、人間があの大海原に面する時の自然の感情、すなわち限りないもの、絶

対的なもの、を予感する独特な感情こそ信仰の本質的な源泉なのだと静かに述べている。しかしフロイトは反対した。つまり「大洋感情」なるものの正体は、実は自我が外界から分離する以前の、自我と世界との一体性への退行的な願望の表現であり、無制限的な自己愛、自我の全能感の希求に他ならない、と手きびしく批判した。――しかしフロイトは盾のもう一面を忘れていなかっただろうか。すなわち、大洋感情こそ全能的な自我の否定であり、小さな自我と外界との一体感の否定の希求であるということである。それは死と親和性の高い、きわめて「人間的な」感情であり、幼稚な気分ではなくて悟達の心眼なのである。

私の父は神奈川県の山村の出身であり、学問がしたくて家を出奔し、東京に出て苦学しながら大学を卒業したという典型的な明治の人間であった。それだけに躾はきびしく、うっかり肘を食卓について食事などしていようものなら、あっというまに茶碗をとばされてしまうという調子であった。そんな父だったから、私には親しいというより恐いという印象の方がはるかに強かった。母もなかなか厳しい人であり、理由はみんな忘れてしまったが、ただ何回となく両手両足を縛られて納戸にほうりこまれたことを覚えている。

私は男性の女性観というものは、その根本のところでは、母親のイメージに影響されるところが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com